

平氏のホームグラウンド・六波羅界限を歩く。

清盛出生の秘密や、平氏一門の本拠地として栄えた名残、
後白河法皇と清盛の蜜月時代を訪ねて散策しよう

『平家物語』によると、清盛が尋常ではない出世を果たす理由は、実父が白河法皇であるためだという。そんな清盛の出生に関わる秘密を匂わせる史跡が八坂神社に立つ「忠盛灯籠」だ。案内板には、清盛の父・忠盛、白河法皇、そして同じく物語で清盛の母とされる祇園女御にまつわる逸話が記されている。

そんな清盛がやがて一門の本拠地として繁栄させたのが六波羅と呼ばれる地域。古くは鴨川の東、五条通（現・松原通）から七条通にかけてを指し、とくに六波羅蜜寺を中心とする界限には平氏一門の立派な邸宅や政庁が立ち並んだという。



忠盛灯籠（八坂神社境内）
八坂神社本殿の東側に立ち、『平家物語』巻六にも書かれている石灯籠。清盛の父・忠盛が白河法皇から祇園女御を預かるきっかけとなった逸話にちなむ。祇園社（現・八坂神社）界限に、祇園女御の住まいがあったという。
●東山区祇園町北側625 八坂神社境内
☎075-561-6155



六道珍皇寺
「平家物語」では清盛の死後「愛宕（おたぎ）」で荼毘（だび）に付したとの記述があるが、この愛宕が六道珍皇寺の付近であるとされる。界限は葬送の道筋だったため、この世とあの世の境「六道の辻」と呼ばれていた。
●東山区松原通東大路西入北側
☎075-561-4129



六波羅蜜寺
平安後期、清盛の父・忠盛が境内に自軍を駐留させたことを機に平家の拠点に。供養塔の清盛塚があり、宝物館では平清盛坐像（重文）を展示。境内には平氏が同地に営んだ邸宅跡を記す「平氏六波羅第跡」碑が立つ。
●東山区五条通東大路上の東
☎075-561-6980



平安京復元模型
六波羅（部分）

京都市生涯学習総合センター（京都アスニー）内の「古典の日記念 京都市平安京創生館」では、平安京復元模型を展示。一部で当時の六波羅が再現されている。
●中京区丸太町通七本松西入
☎075-802-3141

建仁寺

栄西が建立した京都最初の禅寺。扉に矢痕があるために矢の根門と呼ばれる勅使門（重文）は、平氏らが築いた六波羅邸の遺構と伝わる。
●東山区太和大路四条下小松町584 ☎075-561-6363

蓮華王院（三十三間堂）

※正式名称は蓮華王院
後白河法皇が平清盛の資財協力を得て、院の御所とした法住寺殿の中に創建したのが始まり。堂内には極彩色に彩られていた当時の痕跡が残る。
●東山区三十三間堂廻り町 ☎075-561-0467

法住寺

院政期には後白河法皇の離宮・法住寺殿が営まれ後白河院政の拠点となった。本尊は法皇ゆかりの「身代わり不動尊像」を安置する。
●東山区三十三間堂廻り町655 ☎075-561-4137

散策おすすめルート

- 京都市バス「祇園」バス停
- ① 忠盛灯籠（八坂神社） 徒歩約3分
 - ② 建仁寺 徒歩約7分
 - ③ 六道珍皇寺 徒歩約5分
 - ④ 六波羅蜜寺 徒歩約16分
 - ⑤ 蓮華王院（三十三間堂） 徒歩約4分
 - ⑥ 法住寺 徒歩約4分
- 京都市バス「東山七条」バス停

平清盛の京を歩く

王家と貴族が対立する平安時代末期。
武士の王となり、日本の覇者となった男、平清盛。
清盛の栄枯盛衰、そして戦いの舞台、
京を訪ねる旅へ。

TAIRANO
KIYOMORI



王家と貴族が対立する平安期、
武士の王となり、日本の覇者となった男。

平清盛

源氏をおしのけ武家のトップに 躍り出た清盛

平安時代末期、行き詰りつつある貴族政治に変革をもたらす人物が現れた。平清盛。のちに武士として初めて日本の覇者にまで駆け上がる彼は、朝廷に仕える有力武士団・伊勢平氏の棟梁、平忠盛の嫡子として誕生した。

清盛が父の死に際し、その地位と財産を受け継いだのは仁平3年(1153)、36歳のころ。その3年後、父に継いで瀬戸内海沿岸を中心に西国の武士をまとめ上げた清盛は、一門を率い保元の乱(P3)・平治の乱(P5)に参戦。王家と貴族が入り乱れた覇権争いに決着をつけさせ、ライバル関係にあった源氏をおしのけ武家のトップに躍り出た。

やがて時の権力者・後白河天皇と互いの力を使いあう協調関係を築きあげ、これまで貴族が取り仕切っていた中央政界で頭角を現していく。身分の低い武士のなかで初めて公家となった清盛は、仁安2年(1167)には今でいう総理大臣ともいえる太政大臣に就任するまでになった。

平清盛

1118(元永1)～1181(治承5)

平安末期の武将・政治家。平忠盛の子。保元・平治の乱で他勢力を追い払い、太政大臣として平氏政権を確立。娘を高倉天皇の中宮に入内させるなど全盛を誇る。その後、各地で反平氏勢力が挙兵、平氏滅亡前に熱病で没。東山区、六波羅蜜寺の僧形坐像(重文)は清盛像と伝わる。

最高の栄華を手に入れるも反発を招く

強大な力を身に付けていく清盛に対し、一方の後白河法皇は強い不安を感じていた。そして治承元年(1177)二人の関係に決定的な亀裂が入る。鹿ヶ谷の陰謀——後白河法皇の側近による平氏を滅ぼすための密談が露見した事件で、背後で糸を操るのは他でもない法皇自身だった。事件は未然に防がれたものの、そこから法皇の激しい平家追い落としが始まった。清盛はこれに対抗し、治承3年(1179)にクーデター(治承三年の政変)を起こす。都を制圧した後白河法皇を幽閉。院政を停止させ、ついに自らが日本の最高権力者として君臨したのである。結果、公卿や殿上人など国家の要職を平氏一門が占めるようになり、最高の栄華を手にするようになる。

しかし清盛の独裁と平氏の繁栄に対して朝廷や武家、社寺などから強い反発が巻き起こり、平氏打倒のクーデターが勃発。この挙兵が飛び火し、源頼朝や源(木曾)義仲をはじめとする全国の源氏蜂起につながった。全国で内乱が巻き起こるさなか、一門の支柱である清盛が熱病で他界。清盛の死後、急激に衰え始めた平氏は文治元年(1185)、源頼朝率いる源氏と壇ノ浦で最後の戦いに挑み滅亡した。

平清盛を取り巻く人間模様

源頼朝

1147(久安3)～1199(正治1)

鎌倉幕府初代将軍。源義朝の3男。平治の乱で捕えられ、伊豆に配流。以仁王の令旨で平氏打倒の挙兵。源義経らの奮戦で木曾義仲、平氏を滅した。反目した義経の追捕を理由に諸国に軍事・警察権を持った守護、地頭を設け、武家政権を樹立。征夷大將軍となり、鎌倉幕府を創設。

白河法皇

1053(天喜1)～1129(大治4)

第72代。後三条天皇の第1皇子。譲位後、院政を始め、堀河、鳥羽、崇徳の3天皇、43年間の政治をとりしきる。僧兵の抑圧のため源平両氏を起用し、武士進出のきっかけをつくった。

後白河天皇

1127(大治2)～1192(建久3)

第77代。鳥羽天皇の第4皇子。譲位後、5代の天皇の間、院政を行う。平氏の盛衰から鎌倉幕府に至る動乱期に巧みな策略で平清盛、木曾義仲、源頼朝らと対応し、王朝の権威の存続につとめた。

平清盛 盛衰ストーリー

- | | | |
|-------------|-----|---|
| 1118年(元永元年) | 1歳 | 平忠盛の嫡子(長男)として生まれる。 |
| 1120年(保安元年) | 3歳 | 清盛の生母死去。 |
| 1129年(大治4年) | 12歳 | 従五位下に任ぜられる。 |
| 1132年(長承元年) | 15歳 | 父・忠盛が武士として初めて昇殿を許される。 |
| 1135年(保延元年) | 18歳 | 父・忠盛の西国海賊追討の恩賞の譲りで従四位下を任ぜられる。 |
| 1137年(保延3年) | 20歳 | 父・忠盛が熊野本宮を造営した功により、清盛は肥後守を任ぜられる。 |
| 1138年(保延4年) | 21歳 | これより以前、高階基章の娘と結婚するが死別。その後、平時子と再婚。 |
| 1146年(久安2年) | 29歳 | 安芸守を任せられ、瀬戸内の制海権を得る。 |
| 1147年(久安3年) | 30歳 | 祇園社で闘乱事件を起こす。 |
| 1153年(仁平3年) | 36歳 | 父・忠盛死去し、平家の棟梁を継ぐ。 |
| 1156年(保元元年) | 39歳 | 保元の乱 勃発
後白河天皇側につき源義朝とともに源為義、平忠正らを討つ。勲功賞で播磨守を任じられる。 |
| 1159年(平治元年) | 42歳 | 平治の乱 勃発
源義朝と戦い勝利。武士の王となる。 |
| 1160年(永暦元年) | 43歳 | 後白河上皇に命じられ、新熊野神社を造営。 |
| 1161年(応保元年) | 44歳 | 中納言に任ぜられる。
後白河に嫁いだ妻の妹・滋子が、皇子(高倉天皇)を生む。 |
| 1165年(永万元年) | 48歳 | 二条天皇、崩御。 |
| 1167年(仁安2年) | 50歳 | 太政大臣を任じられるが、3か月で辞任。 |
| 1168年(仁安3年) | 51歳 | 熱病に苦しめられる。その後、出家する。
厳島神社を大規模に造営する。 |
| 1169年(仁安4年) | 52歳 | 福原(現・神戸)に別荘を造営し、住まいとする。 |
| 1170年(嘉応2年) | 53歳 | 後白河法皇を福原に迎え、中国・宋の特使と面会する。 |
| 1173年(承安3年) | 56歳 | 大輪田泊に人工島・経が島竣工。 |
| 1177年(治承元年) | 60歳 | 鹿ヶ谷の陰謀 発覚
平家に対立する院近臣を一掃し、後白河との対立が深刻化。 |
| 1179年(治承3年) | 62歳 | 長男・重盛死去。
清盛、後白河を幽閉、院政を停止する。 |
| 1180年(治承4年) | 63歳 | 京都から福原への遷都を断行するが、6か月で還都する。
源頼朝が伊豆で挙兵。富士川の戦いで平氏軍敗走。 |
| 1181年(治承5年) | 64歳 | 熱病に倒れ死去。 |

保元合戦図屏風(馬の博物館蔵)

保元の乱。戦いの足跡をたどる。

天皇と上皇(元天皇)の間で起きた政治の実権争いは、武士による“合戦”で決着がつけられた。清盛が政治の中枢に躍り出るきっかけになった、わずか4時間の戦いの軌跡を追う！

王の座をめぐる兄弟の戦いが、都を戦場に変えた

保元元年(1156)7月11日午前4時。鴨川の河原に戦の始まりを知らせる時の声が上がった――。

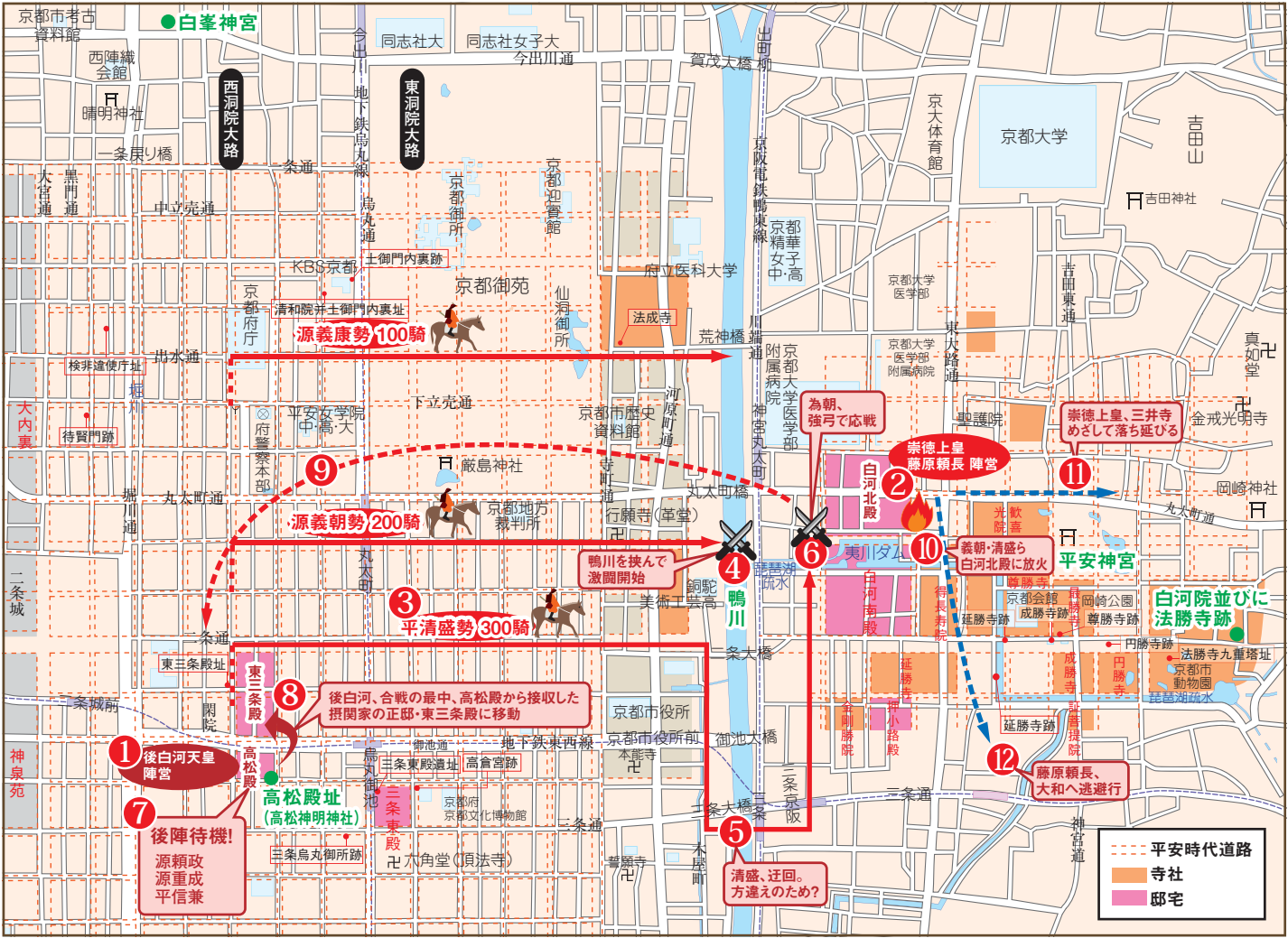
貴族たちが支配する平安の都が、はじめて合戦の舞台になったこの時。対決する軍勢は2つ。一つは兄・崇徳上皇の陣営。もう一つは弟・後白河天皇率いる勢力だ。血を分けた兄弟によるこの戦いは、皇位継承をめぐる天皇家の争いに摂関家内部の権力闘争を巻き込んで起こった。もはや解決はままならず、清盛ら武士の力を借りた戦で決着を付けることになったのである。

両陣営が戦闘準備に入ったのは、兄弟の父・鳥羽院が死去してからのことだった。長らく父にないがしろにされていた崇徳上皇は左大臣・藤原頼長と手を結び、源為義・為朝親子と平忠正ら武士を招集。白河北殿(現・京都大学医学部附属病院の南側)に入り陣地とした。一方、弟・後白河に付くのは頼長の兄・藤原忠通や

側近の藤原通憲(信西)。彼らの進言で源義朝(為義の子)・平清盛(忠正の甥)ら武士を味方につけた後白河は、亡き父から継いでいた皇位を確かなものにするために高松殿(現・釜座姉小路通東入)で策略を練っていた。こうして天皇家・摂関家・源平両家は真二つに分かれ睨み合い、都はものものしい雰囲気包まれた。

夜襲の決断が勝敗を決す！

先手は後白河陣営が取った。7月11日未明、夜襲の許可を得た義朝・清盛の軍勢600余騎は、崇徳陣営が立てこもる白河北殿を目指した。そして午前4時、鴨川で防衛線を張る崇徳陣営と激突。一時は混戦となったがやがて上皇の御座所・白河北殿に火の手が上がった。敗れた崇徳上皇は讃岐(現・香川県)に流され、頼長は戦いの最中に流れ矢に当たり逃走中に落命。為朝は伊豆大島に配流。清盛は叔父・忠正を、義朝は父・為義を自らの手で処刑した。



保元の乱、人物相関図

勝者	 後白河天皇 崇徳上皇は異父兄。崇徳を排除したい父・鳥羽院の意向で、兄を差し置き29歳で頂点に立つことになった	 藤原忠通 頼長の兄。頼長を溺愛する父・忠実にくれとまれ頼長と対立し後白河天皇側に。関白・摂政・太政大臣を歴任	 平 清盛 崇徳上皇と親しかったが、天皇の正当性から後白河側に付く。乱後、後白河や信西から重用され出世	 源 義朝 源為義の長男。鳥羽院の遺命に従い後白河天皇に付く。恩賞などで清盛と差をつけられ不満を募らせていく
	 崇徳上皇 父は鳥羽院ではなくその祖父・白河上皇とされるため鳥羽院から憎まれる。院政の道を閉ざされ息子の皇位継承も阻止された	 藤原頼長 関白・忠通の弟で左大臣。前関白の父・忠実は優秀な頼長を寵愛し「氏の長者」の地位を兄・忠通ではなく彼に与えた	 平 忠正 清盛の叔父だが、崇徳上皇や藤原頼長との関係が深かったため、保元の乱では崇徳上皇側に付いた	 源 為義・為朝親子 為義は源氏の棟梁。長男・義朝とは不仲で、義朝以外の6人の息子を率い崇徳に付いた。為朝は為義の8男で名の知れた猛者

戦いの経過を追う	保元元年(1156)6月1日 ①鳥羽院の病状悪化。後白河天皇の里内裏高松殿に北面の武士動員	保元元年(1156)7月5日 鳥羽院死去から3日後に、後白河側が検非違使や諸国の武士らを動員し、京中の警備にあたらせる
	7月11日未明 ②崇徳上皇、白河北殿へ移る ③平清盛、源義朝、源義康ら合計600騎が白河北殿に向けて出発	午前4時頃 開戦 ④鴨川を挟んで崇徳、後白河両軍の激戦開始！義朝一斉に敵に矢戦を仕掛けるが弟・頼賢に敵戦され後退 ⑤清盛、鴨川を渡る。腹心が約50騎引き連れて白河北殿の西門に迫るが、源為朝の強弓に阻まれる ⑥清盛の嫡男・重盛が為朝めがけて突入しようとするが、無謀だと清盛の命で郎党に取り押さえられる
	午前6時頃 ⑦為朝らの奮戦で戦況はなかなか動かず。後白河側は援軍として第2陣を派遣。後白河方の総数は千騎近くに上る ⑧後白河天皇、開戦の前に接収していた頼長の邸宅・東三条殿に移動。二種の神器も共に移す ⑨白河北殿では激戦続く。崇徳方の粘り強い抵抗のため東三条殿に使いをやり、後白河に焼き討ちの許可を仰ぐ	午前8時頃 ⑩信西より焼き討ちの許可を得た義朝、清盛らが、白河北殿に放火。後白河陣営勝利 ⑪崇徳、混乱に乗じてひそかに東門から脱出。現滋賀県の三井寺めさし落ち延びる
	7月14日 ⑫藤原頼長、父を頼りに大和へ逃避行するも死亡	7月23日 崇徳上皇讃岐へ配流。のちに悲嘆のなか、配流地で死亡



さんじょうひがしどの い し
三条東殿遺址
もとは白河法皇の院御所で、のちに鳥羽上皇や後白河法皇に受け継がれた。平治の乱の始まりの場所で、源義朝と藤原信頼がここを襲撃する様子は『平治物語絵巻』にも描かれている。

●中京区姉小路通鳥丸東入南側



たかまつどのあと たかまつしんめいじんじゃ
高松殿址(高松神明神社)
醍醐天皇の皇子・源高明(みなもとのたかあきら)の邸宅跡。一度焼失したが新造され、後白河天皇即位の地となった。保元の乱で後白河陣営の本拠地になり、その後、平治の乱で焼失。邸内の鎮守社・神明社は現在も高松神明神社として残る。

●中京区姉小路通釜座東入北側
☎075-231-8386



しらかわいん ほっしょうじ あと
白河院並びに法勝寺跡
白河院はもともと藤原一族の別荘地。白河天皇に献上されると院内に法勝寺など6つの寺院が建てられた。法勝寺には東寺の五重塔を大きく超える約81mもの八角九重塔が作られたが、地震や火災などで焼失。

●左京区岡崎法勝寺町



べいあんじんぐう
平安神宮
平安京を遷都した桓武天皇と平安京最後の孝明天皇を祀る。社殿は平安京の朝堂院を約八分の五の規模で再現。拝殿は大極殿を模し、いずれも当時の建築様式を採用しているため、当時の大内裏の雰囲気を体感できる。

●左京区岡崎西天王町97
☎075-761-0221



かもがわ
鴨川
平安京北東部の鴨川沿いで戦いは行われた。後白河陣営は鴨川沿いにしかれた崇徳陣営の戦線を突破し、本拠地・白河北殿で交戦。北殿はやがて焼き討ちされ、崇徳上皇や頼長らは落ち延びようとする。真夏の未明から朝にかけてのことだった。



ほっしょうじ
法勝寺復元模型
院政期、白河(現左京区岡崎)の地には六勝寺と総称される6つの寺院があった。法勝寺はその筆頭寺院で、八角九重塔が壮麗な姿を見せる同寺の模型が「古典の日記念 京都市平安京創生館」で展示されている。
●中京区丸太町通七本松西入
京都市生涯学習センター(京都アスニー)
☎075-802-3141

スポーツ選手の参詣が絶えない崇徳上皇ゆかりの社



しらみねじんぐう
白峯神宮
失意のなか、配流地の讃岐で生涯を終えた崇徳上皇をお祀りする。同地は蹴鞠の宗家だった公家・飛鳥井家の屋敷の跡地であったため、境内社には蹴鞠の守護神「精大明神」が祀られている。このため今ではサッカーのほか、おもに球技をはじめスポーツ全体の守護神として信仰され、サッカーやバレーボールの日本代表チーム、Jリーグに所属する選手の参詣が絶えない。

●上京区今出川通堀川東入飛鳥井町 ☎075-441-3810

平治の乱。戦いの足跡をたどる。

保元の乱からおよそ3年——今度は勝者の間で争いが巻き起こった。
院近臣の座を巡っての朝廷内部での争いは、京の広域を巻き込んだ初の源平合戦へ発展。
清盛をトップに押し上げる契機になった壮絶な争いの経過を追う！

「平治物語絵巻「六波羅合戦の巻」デジタル復元図」国際日本文化研究センター所蔵

都でクーデター、起こる！

平治元年(1159年)12月10日。一門を率いて熊野参詣に向かう清盛の元に、京の危急を知らせる早馬が駆けつけてきた。後白河院(上皇)の近臣・藤原信頼と源義朝らが結託し、クーデターを起こしたという。

保元の乱の後、子の二条天皇に譲位して院政を行う後白河院のもとでは、信西が拔群の才覚で政務を独占し、清盛はそんな2人に重用され朝廷を守る武門の地位を確立していた。信頼は、何かと自身の障害になる信西が目障りで仕方がない。一方の義朝は、保元の乱で平氏を上回る活躍をしたにも関わらず、恩賞や一族の刑罰の重さで平氏と差を付けられ不満を募らせており、2人の思惑が一致した。

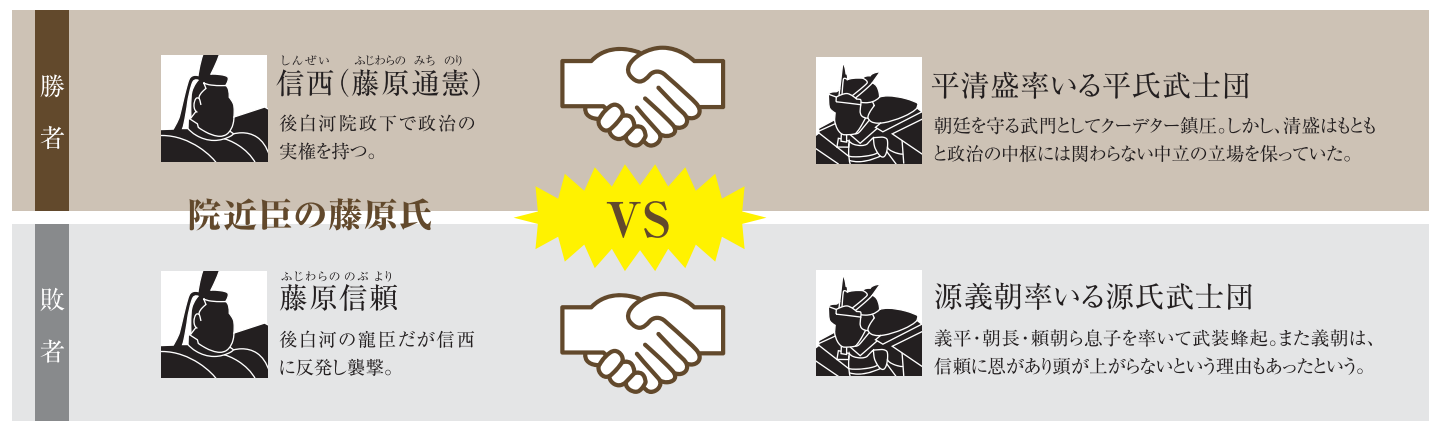
そして12月9日。義朝らは、三条東殿を襲撃して後白河院と二条天皇を内裏(御所)に移して幽閉。同時に信西一族を抹殺するために信西の屋敷に火を放ち、逃げる者は老若男女問わずに殺害した。反乱を予測し直前に都を離れていた信西は、山城国田原に逃げるも逃げ切れないと覚悟を決め自害。遺体は斬首され京で獄門に晒された。

六条河原で源平が雌雄を決する

留守を突かれた清盛は、急ぎ都に舞い戻る。都は源氏の制圧下に置かれていた。ひとまず天皇と上皇の救出が先決と考えた清盛は、いったんは恭順の意を表しながら水面下で工作を進め、後白河院と二条天皇の奪還に成功。天皇方を味方に付け官軍となり、源氏と信頼の追討に転じた。

天皇・上皇を救出してすぐ、清盛の子・重盛と弟・頼盛が率いる平氏勢は、源氏が立てこもる大内裏を急襲。清盛の一計で内裏を奪還された義朝軍は「ならば清盛の首を取るまで」と平氏の本拠地・六波羅へ進撃し、六条河原で初の源平合戦が繰り広げられた。源氏軍は味方の寝返りなどもあり、奮戦むなしく敗走。信頼は六条河原で斬首となり、義朝は逃亡先で身内の裏切りに遭い謀殺された。この政変を收拾させた清盛は、武家の棟梁としてその地位と権力を急速に高めていった。

平治の乱、人物相関図



平安宮一本御書所跡

当時の内裏は現在地よりもずっと西側に位置し、現在の京都御所は安政2年(1885)に再建されたもの。後白河上皇が幽閉された一本御書所は、当時の内裏の東側にあり、現在の山中油店付近に在る。

●上京区下立寺通知恵光院西入北側



待賢門跡

平安宮外郭東側の門。清盛に御所攻めで大将を命じられた重盛は邸宅を率いて大内裏東門の陽明門、待賢門、郁芳門の三門を攻めにかかった。現在の大宮通と樺木町通の交差点附近が待賢門跡にあたる。

●上京区猪熊通下立売下の西側



源氏堀川館跡・左女牛井之跡

左女牛井は平安時代から名水として知られていた井戸。界隈は源氏の本拠地で、源頼義・義家・為義・義朝・義経などが居を構えた六条堀川館があり左女牛井はその邸内にあった。現在は石碑が残る。

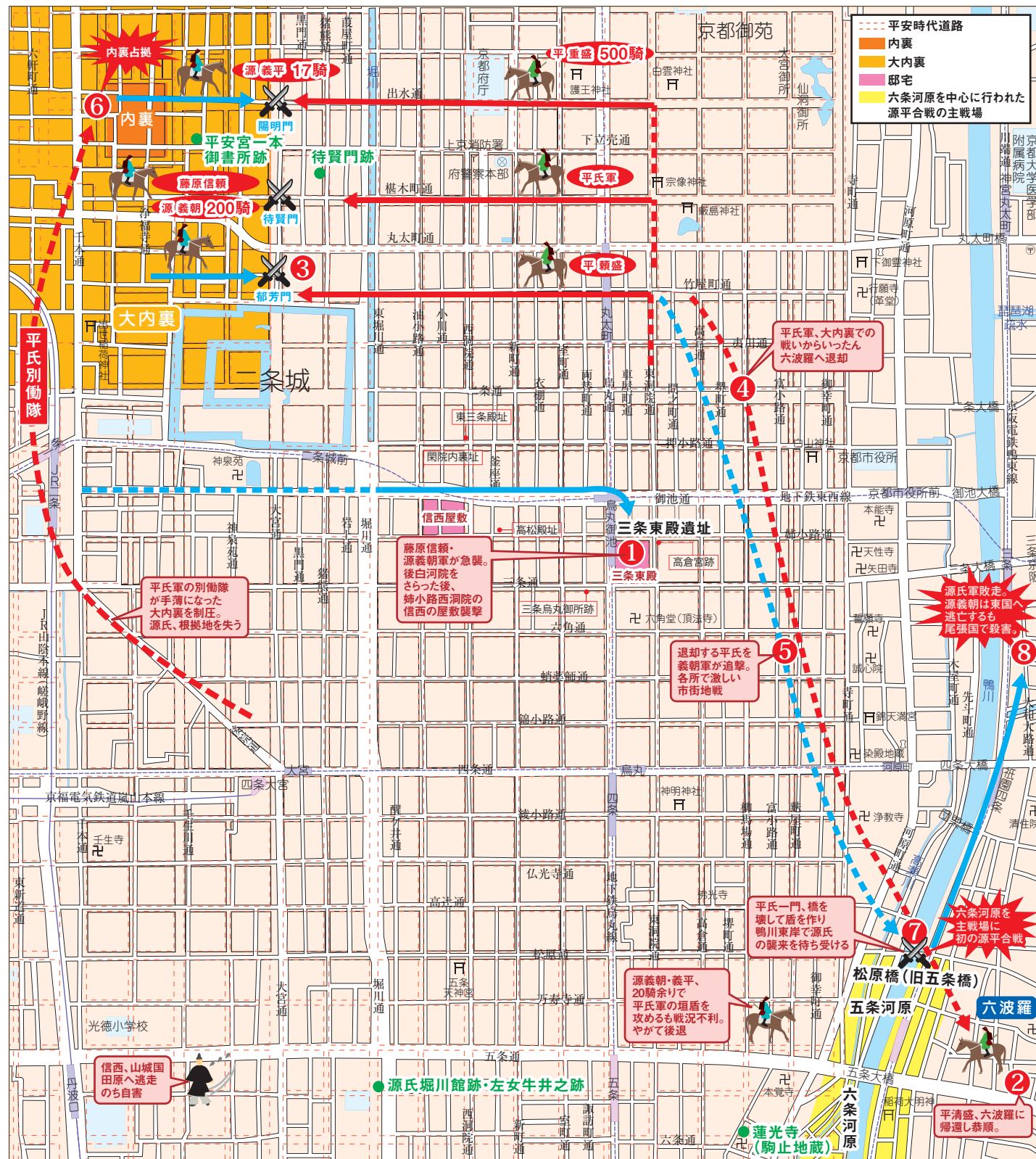
●下京区堀川通五条下の西側



蓮光寺駒止地蔵

駒止地蔵は弘法大師作と伝えられ、六条河原の刑場に祀られていたとされる。鴨川の氾濫で埋もれていたが、清盛の乗った馬が近くを通った際、急に動けなくなり周辺を掘り起こした時に発見された。

●下京区雷小路通六条上る本塩町534
☎075-351-3066



戦いの経過を追う

平治元年(1159) 12月4日 清盛が熊野参詣に出発。

12月9日 ①反信西派、三条東殿襲撃。平治の乱勃発！後白河院と二条天皇を内裏に幽閉。大内裏を占拠。信西、山城国田原に逃れる。

12月14日 藤原信頼、実権奪取。宮中で除目を行う。

12月17日 未明 ②清盛、六波羅に帰還。信頼に恭順の意を示す。

12月25日 夜、26日未明 清盛の工作で25日の夜、脱出計画を実行。明けて丑の刻午前一時頃、二条、六波羅へ脱出。後白河・仁和寺へ脱出。

12月26日 朝、午後 ③平重盛と頼盛、大内裏東側より攻める。④平氏軍、本拠地六波羅へ退却。⑤源氏軍、逃げる平氏を追撃。⑥平氏別働隊、西から手薄になった大内裏を攻め、内裏を奪還。退路を断たれた源氏軍は六波羅へ進撃。⑦六条河原を主戦場に初の源平合戦。⑧源氏軍、敗退し東国へ逃亡。

12月29日 二条天皇、八条の美福門院邸に移る。

永暦元年(1160) 1月3日 義朝、尾張国で謀殺。

6月20日 後白河院に反対するその他勢力を一掃した清盛、公卿に昇進。

8月11日 清盛参議に昇進。七年後、清盛は国家の最高職、太政大臣となり、平氏は栄華を極めていく。